

# グローバリゼーションの時代における人間の条件

エティエンヌ・タッサン

翻訳：渡名喜庸哲

本稿では、ハンナ・アレントが50年代の終わりに練り上げた有名な分析を現代に合わせて読解し、世界政治（コスモポリティック）という観点を刷新することによって、世界化（mondialisation）としてのグローバリゼーション（globalisation）<sup>1</sup>のプロセスを検討するためのいくつかの手掛かりを示唆してみたい。私が主張したいのは次のことである。つまり、今日グローバリゼーションと呼ばれているものが対応しているのは、世界化ではまったくなく、アレントによれば世界の破壊に起因するような世界喪失（acosmisme）の全般化である、ということだ。それは、実のところ、マックス・ヴェーバーが世界の脱魔術化ないし脱魔法化（*Entzauberung*）と診断したもの、あるいはハイデガーが「脱世界化（*Entweltlichung*）」として考察したものを成就するものである。もし、見かけに反し、グローバリゼーションが、文化的な面でも政治的な面でも、人間が世界に帰属することの、つまり人間的世界の建立に帰属することの主要な妨げであることが明らかになるとすれば、われわれは逆に、世界化を、グローバリゼーションに抗するかたちで樹立される新たなかたちの世界性のありかたとして考えるべきではなかろうか。

このような主張は、以上のように提示すると、挑発的に聞こえるかもしれない。だがそれは、共通の、共有された経験に呼応するものであり、現象学的な観点からも政治的な観点からもこの経験の妥当性を補強する厳密な哲学的概念化を経たものである。このことは、たとえば、英語やドイツ語、さらにはスペイン語、イタリア語、ポルトガル語とは異なり、フランス語では「グローバリゼーション」ではなく「世界化（mondialisation）」が好まれるという点に示唆されている。この語彙上の差異には、哲学的な意味合いを添えることができる。というのもそこには、世界（monde）が問題になる際のまさしく政治的な意味——世界性（mondanéité）——（もちろん、そこに含まれる文化的な意味に加えて）と、グローブ（globe：地球）が問題になる際のまずもって経済的な意味——グローバル性——とを隔てる批判的な観点を認めることができるからだ。もしグローバリゼーションが指し示しているのが何よりもまず経済的なプロセスであり、他方で世界化のほうは文化および政治という二重の次元に関わっているのだとすれば、世界化とグローバリゼーション（世界と地球）の乖離から、政治と経済の関係についての問いが引き起こされるだろう。世界についての政治的な考察に基づくならば、何らかの（政治的な）世界化のもとで（経済的な）グローバリゼーションの批判を行なうにあたって、グローバリゼーションの時代における人間の条件について新たに理解しうる世界政治的な観点を据える必要があるのだ。

以下ではまず、足早に、グローブ（globe）と世界（monde）のそれぞれからもたらされる二つの観点がどのように異なるかを示す（1）。さらに、ハンナ・アレントの人間の条件についての分析に依拠しながら、政治が世界とどのような関係を保つことができるのかを検討し（2）、さらにそこから、政治が引き受けるべき世界への関心の三つの次元を引き出したい（3）。以上により、地球という地平で展開される経済的なグローバリゼーションにおいて、〈世界への帰属〉に何が起きているのかを考えることができるようになるだろう（4）。

## 1. 世界化 vs グローバリゼーション——グローブではなく世界

地球という領域には一体性が含まれているが、これは、共通の世界（monde commun）を規定するには十分ではない。経済的なグローバリゼーションが、そこに生きる人々、諸々の文化や社会など惑星の全体をすでに部分的には一つの世界へと統合したということについては異論を唱えがたいとしても、それでもやはり、この統合された

グローバルな領域の一つの世界が、本当に世界であるのかどうかはまったく既定のことではない。地球ということで規定される一体性は、実のところ、世界を、わけても共通世界を構成する複数性とは対立する。というのも、世界がまずもって複数のでなければ、言いかえると、数えきれない抗争によって働きかけられ分割されているのでなければ、どうして世界が共通のものであると言えるのか。資本の配当からはじまり生産と分配を通じて消費にいたるまで、惑星規模での諸々の領域や人々の全体性が市場の単一な法則へと従属させられるとき世界がどうなるかを問うこと、それは、諸々の存在の、つまり諸々の人々、共同体、文化、さらには国家を構成する複数性が、グローバルな単一の経済プロセスのただなかで排除されるとき世界がどうなるかを懸念することにほかならない。この経済プロセスによって、世界内の文化や政治の多種多様性に対する惑星的な均質性が強化されるのである。おそらく、アレントが世界市民権を「それほど一体化されていない世界に対する共通の欲望」(Arendt, 1974, 96) に結びつけたときに示唆していたのもこのことだろう。分割された世界へと向けられたこうした共通の欲望に対しどのように注意を向けるべきか。複数性という条件に忠実なこの欲望は、まさしく政治的と言うべきものなのであって、グローバリゼーションに結びついた経済的な一体化によって世界が解体されるなかで、どのようにして分割こそが世界を作り出すのかということを考えさせてくれるのである。

世界化をグローバリゼーションへと吸収させることの公認の論拠は、カントの『永遠平和のために』の第三確定条項冒頭の宣言のうちに見いだされるように思われる。だが、世界市民の権利を支持するカントの議論は誤解されやすい。そこでは、地球の領域性が、〈大地〉が人類全体に属していることの要因として、そしてまた各々の人間存在が世界のどの部分をも訪問することのできる権利の根拠として考えられているためだ (Kant, 1986, 350)。そこから、世界が人類全体に共通のものであるという可能性は、地球が一体であることから派生する、と結論されることになる。してみると、〈大地〉は、その地球的な性格のゆえに共通の世界である、ということになろう。つまり、〈大地〉の領域性は、そこに住む人々が自由に、限りなく移動することができるということを含み、したがって、その土地に移住してくる人々を権利上受け入れることを含む、というわけだ。となると、世界性 (mondanité) —— 歓待と原理とする、世界を構成する人間性 —— は、地球的という性格に基づくものとなるだろう。こうした議論は、その意図に照らすならば妥当である。つまり、どのような人間存在も地球上どこでも移動することができ、また人間の尊厳の尊重ということでもって、各国において受け入れられることができるという世界市民的権利の基盤となるからだ。もちろん、このような権利は、現在のグローバリゼーションの文脈では過小評価すべきではあるまい。第一次大戦直後の無国籍者がそうであったように (Arendt, 2000, ch. IX)、現在でも移住を余儀なくされた人々が仮借なく犯罪者化され、滞在許可証をもたない移民には人間性が却下され、あらゆる尊厳が否定されているからだ。地球から排除されるのでないとはいえ、—— 全体主義における強制収容所を実験場とする大量虐殺とは別のしかたで —— 世界から排除されることによって、こうした人々は自由民主主義国家が権威主義国家ないし「ならず者国家」と結ぶ取り決めのおかげで、事物か動物のように取り扱われ、人間の人間性をなすはずの権利を奪われることになるのだ。

しかし、このような文脈から離れると、地球の領域性を典拠とすることについては次のような問題を考えなければならない。すなわち、今日慣習的にグローバリゼーションと呼ばれているものは、世界化ないし人間化と結びついた運動を自動的にもたらしてくれるのか、という問題である。あたかも、グローバリゼーションのプロセスが、あますところなく世界化のプロセスと等価なものであるかのようにである。だが、カント的な観点からですらまったくそうはならない。これら二つの概念は区別されなければならないのだ。カントの議論において、歓待が隠喩的に地球 (globus) の領域に書き込まれうるとしても、その存在根拠は、実のところ、惑星の領域的な一体性には何も負うところのない、世界 (mundus) という観念に見いだされるのである。そしてこの存在根拠とは、政治的なものである。あるいは、より厳密に言うならば、世界政治的なものである。ただし、この世界政治とは、厳密に言うともはやカント的な意味ではなく、新たな意味で理解されなければならない。つまり、グローバル化ではないという限りにおいてしか世界的ではないような、そういう世界の思想、世界の政治と関連づけて考えなければならないのである。

## 2. 政治と世界：新たな人間の条件

政治が世界および人間の条件とどのような関係を有しているのかをはっきりさせるためには、われわれはアレントが1958年以降展開している「活動的生 (*vita activa*)」についての分析にすぐれた導きの糸を見いだすことができる。彼女が提起する人間の活動性の分類では、人間がつき従う三つの条件——生、世界への帰属、複数性——が、それを満たす三つの活動性——労働、仕事／作品<sup>2</sup>、活動——にそれぞれ結び付けられる (Arendt, 1981; Tassin, 1999, 285)。これについて、労働は生へ、仕事は世界への帰属へ、活動は複数性へというかたちで、それぞれの活動性を各々に固有の条件へと関連づけることは容易にできるし、それとともに、こうした活動の展開に応える社会領域がどのようなものか、同時に、それがどのように歴史的に進展してきたのかをも示すことができる。

労働という活動性が関わる経済的な家政という領域はもともと私的なものであって、生の再生産を旨とするものであったが、徐々に社会全体に進出し、近代においては、共生の領域を唯一組織化することができる次元となるにいたった。仕事／作品——使用品や芸術作品——の製作的な活動性に結びついた社会的・文化的な領域は、もともとは人間的な世界を樹立するはずのものであったが、徐々に市場の論理に従属していくようになる。そしてこの論理が、今日では、経済的・社会的な生の総体を差配するようになってきているのだ。公的・政治的な領域は、市民たちが解放をもとめて闘ったり、共同的な規範目標を定める際の利害や価値観を対立させたりするような、市民間の討議的な活動が織りなされる領域であったが、これもまた経済的な至上命題によって吸収され、資源と人口の管理へと還元されるまでになるのである。

このような活動的生の分析に基づくことで、われわれは、グローバル化したと言われるこの世界を特徴づけている諸々の緊張関係を描くことができると同時に、逆に、本来「世界の政治」とはいかなるものかについての概要も引き出すことができる。それは労働に属し生の再生産に関わる事由と、仕事／作品に関わり世界の樹立に結びつく事由、そして人間的な共同体を分割する抗争をはらむ市民的な活動に関わる事由とを等しく引き受けることのできるような政治である。それによってわれわれは、経済的なグローバリゼーションしかないことの有害な帰結に対して立てられる世界化の政治的な意味と意義とを捉えることができるだろう。

そのためには、上述の三つの活動性がそれぞれ関わる経済的な次元、社会・文化的な次元、政治的な次元のそれぞれでどのような世界性がかかり立てられるかに注意を払う必要がある。この場合すぐに気づくことができるのは、アレントが示すように、世界への帰属が、人間の製作物からなる世界を樹立する仕事／作品の条件であるにせよ、われわれの世界への関係それ自体は、製作的・技術的、文化的・社会的な領域だけに汲みつくされるものではない、ということである。われわれが世界のうちにあるということ〔世界内存在〕は、経済的、社会・文化的、そして政治的という三つの次元において等しく繰り広げられる。そして、世界それ自体もまた、われわれが世界を樹立する際に問題となる人間に固有な物質的ないし象徴的製作物からなる世界とは異なる相貌を呈する。もちろん、人間の世界は、まずもって文化的な世界である。すなわち、民族的であれ国家的であれ、あらゆる人々や国民に関わる複数形での文化からなる世界である。だが、それだけにはとどまらない。人間の世界は、自然の世界でもあるし、生の世界でもあるし、さらには、地政学の世界、相互のいさかきや、戦闘的な対立、共同体内ないし共同体間の抗争の世界でもあるのだ。

したがって、考慮に入れなければならないのは、次のような二つの異なる方向に向かう主張である。この両者の関連が世界政治全体の争点をまさに規定するからである (Tassin, 2011 b)。一つは、アレントの活動的生の分析に基づき、世界への帰属を仕事／作品の特殊な条件とするものである。仕事／作品が世界への帰属によって条件づけられているということ、このことが意味するのは、労働も (したがって経済も)、活動も (したがって政治も)、世界を自らに特有の条件としては要請していないということである。たとえ、もちろんのこと、どのような生も経済的な「生活世界」(生の経済)を前提にしているし、活動的・討議的な複数性はどれも政治的に組織化された「複数の共同体からなる世界」(複数のものの政治)を離れては展開しないとしてもである。いずれにせよ、経済的な活動性を条件づけているのは生きた存在であるということであり、政治的な活動性の条件は複数性である。こ

れらに対して、製作的な活動性のみが、人間的な世界の文化というかたちで世界への帰属を条件とするのである。逆に、もう一つの主張からすると、製作を条件づけるこのような世界への帰属が、どのようにして存在の別の領域へと分岐するか、また、そのことにより、こうした領域において世界がどのようにして問題となるかを考慮に入れなければならない。生の再生産に対する経済的な関与が人間のあらゆる活動にまで力を及ぼすようになれば、また、市民、人民、国家が互いに抗争関係に陥るようになれば、世界への帰属はどのようになるだろうか。言い換えれば、経済的な競争や政治的な抗争は、いかにして世界についての問いに出会うのだろうか。

この問いに答えるためには、以上のそれぞれの条件のあいだの緊張関係を考慮に入れなければならない。というのも、それぞれに対応する活動性それ自体が、——毎日その証言はもたらされているのだが——互いに矛盾しあうようになってきているからだ。生が世界に対して立ちはだかってくるとき、あるいはまた複数性が世界を破壊せんとして立ちはだかってくるとき、何が起こるのか。そこには、構造的に、生ならびに複数性の「世界喪失(acosmisme)」があるのだ。生の飽くなきプロセスは、ただそれだけに任せてしまうと、世界を破壊するようになる。同様に、複数性の無秩序も、自分自身にだけ委ねられ政治的に組織化されなくなれば、当然のごとく世界を破壊するようになる。あるいは逆に、それが全体主義的支配に資するような画一的で中央集権的な政治の鋼鉄の輪に従属するようになれば、複数性が削除され、世界の破壊が進行することになるだろう。したがって問わねばならないのは、一方の複数の政治的活動と他方の生に関わる経済的活動によって、世界がどうになってしまうのか、政治的活動と経済的活動は、それ自体にのみ委ねられると、世界に何をもたらすのかということである。要するに、利益を求める競争や、これによってもたらさせる生の飽くなきプロセスがもはや社会的な動因を有さなくなり、政治的に組織化されなくなってしまったら、世界には何が起こるのか。あるいは、政治的な行為者、個別的、共同体的、国家的行為者がもはや世界を「目ざして」行為することをやめ、意味を有した世界へと帰属するための要件に自らの行為を合わせることをもはやしなくなり、あらゆる生やあらゆる人間的な行為が有する内世界的かつ世界的な意義を認識することなく競い合いに繰り出すとき、世界には何が起こるのか。

この主張の射程はけっして無視すべきものではない。そして、これこそアレント自身が、次のように述べるときに強調していたことなのだ。「政治の中核で見いだされるのは、人間への関心ではなく、つねに世界への関心である。そして実のところ、なんらかの仕方で組織された世界の関心がなければ、自らのことに関心を抱いたり政治を行なう人々は、生など生きるに値しないとみなすのである」(Arendt, 1995, 44)。アレントが政治の核心にあるものとして提示しようとするこの関心はいかなるものか。上述の三つの活動性に基づく三つの存在の次元それぞれについて、いかにこの関心を引き受けることができるのか。

### 3. 内世界的な三重の要請

このような関心が、世界がわれわれに現れるときの三つの側面それぞれに応じて変化するということは認めねばなるまい。この世界への三重の関心は、内世界的な三重の要請と呼ぶものをもたらすことになる。

第一の経済的な次元は、生を条件とし、したがって、マルクスの表現では、「つねに死ぬさだめにある生を再生産する」労働に関わる。この次元においては、世界は生の世界〔生活世界〕として現れる。この世界は、惑星的な生存環境、生息域ないし生物の生態系として捉えられる。この観点からすると、世界への関心は、環境への関心として現れる。これに対応するのは、エコロジ的であれという要請である。

第二の文化的・社会的な次元は、世界への帰属を条件とし、したがって、人工物としての世界を樹立する仕事／作品に関わる。この次元においては、世界は文化の世界として、しかもつねに複数の文化の世界として現れる。この世界は、人間の精神がさまざまな象徴的表現でもって生み出したものの世界であり、過去から現在までの文化の博物館と言えるほどの世界である。この次元では、それは人類に共通の文化財として捉えることができる。この観点からの世界への関心は、文化財への関心である。この関心に対応するのは、居住空間的(œcuménique)であれという要請である。

第三の政治的な次元は、複数性——諸々の存在、共同体、国家の——を条件とし、したがって、人間、人民、国家のあいだの「自由平等」(Balibar, 2010)を促進すべきものとしての活動に関わる。この次元では世界は複数

性的世界として現れるが、これは自由の世界、平等の世界と切っても切れない関係にある。この世界は、それ自体は触れることができない人間的な紐帯からなり、国家的であれ超国家的であれ、諸々の現れからなる公的・政治的空間を条件として展開する関係の網の目である。このような次元では、世界は複数の行為者の共通の舞台ないし地平として捉えることができる。こうした行為者の政治的な存在様態は定義上国家を超えたものである。まさしく「各国の国家的なものが世界史のなかに入ってくるときには、それはつねに国家的なものにとどまり、そこに執拗に固執する」からである（Arendt, 1974, 103）。この観点からの世界への関心は、複数的な関心である。この関心に対応するのが、世界政治的（cosmopolitique）であれという要請である。

したがって、これらの三重の世界観——すなわち、生物の生態系（労働する動物（*animal laborans*）の再生産のための自然的・人為的体系からなる生命環境）としての世界、人々の文化財（製作人（*homo faber*）の文化として、世界への帰属のさまざまな形態を物質的にも非物質的にも象徴化したもの）としての世界、そして、国家を横断する、公的・政治的舞台ないし討議的な行為の内世界的な場（政治的動物（*zōon politikon*）の新たな形態たる、政治的な行為者たちからなる超国家的な網の目）としての世界——、これら三つの表象に対し、環境的、文化財的（あるいはオーギュスタン・ベルクの言葉を用いるならばエクメーネ的<sup>3)</sup>）、複数的、という三つの関心が対応する。そして、これらと相関して、エコロジー的、居住空間的、<sup>コスモポリティック</sup>世界政治的という三つの要請がある。これらの三つの関心と三つの要請はそれぞれ結びついており、総体として、世界に関する政治の要件および争点を描き出す。世界に対する環境的な配慮は、同じ世界に対する文化財的な配慮とは切り離せないし、この両者はこの世界そのものに対する複数的な配慮から切り離せないのである。このようにしてこそ、「政治の中核で見いだされるのは、人間への関心ではなく、つねに世界への関心である」ということについての困難な、しかし強度のある理解がもたらされる。というのも、政治ということでもってまず問題になるのは、人間や生ではなく、何よりもまず世界だからである。この世界とは、すなわち、生きられた世界、他者と抗争的に共有されているがゆえに共通の世界、したがって複数の世界に分割された世界のことである。こうした世界なしには、生はけって存在の品位にまで高められることはないし、他者との、あるいは他者に対抗する討議的な行為は、自らの住処も自らの意味の地平も見出すことはなくなってしまうだろう。

こうして立てられるのは、政治がいかに世界に出会うか、あるいは、いかに世界への関心へと秩序立てられるのかという問いであり、さらには、どのようにして政治は、三重の要請によって、同時にエコロジー的、居住空間的、<sup>コスモポリティック</sup>世界政治的であれと促されるのかという問いである。ところで、この点についてここで認めざるをえないのは、世界への関心のこうした三つの次元が浮かび上がらせる争点に見合った世界政治は今日にいたるまでまったく存在していないし、国家ないし国際機関がはらってきた努力がどれほどのものであれ、上の三重の要請に忠実な世界政治もまったく存在していないということである。もちろん、自然資源や生態系の多様性の保護について、数々の「サミット」があった。ローマ・クラブの報告<sup>4)</sup>以来、リオデジャネイロ・サミット<sup>5)</sup>があり、最近ではリオ+20<sup>6)</sup>が行なわれたし、また環境保護に関心を抱く多くの国際機関がエコロジー的な要請にもとづいた請願を行ってきた。この要請はもちろん、地球規模の食糧供給の問題とも交差するものである（国連食糧農業機関（FAO）、国連開発計画（UNDP）等々）。あるいは、ユネスコや世界遺産に関心を抱く多くのNGOがはらってきた努力は、文化間対話という汎世界的な要請によってもたらされてきたものであろう。あるいはさらに、世界的な共同体ということへの関心や<sup>コスモポリティック</sup>世界政治的な要請は、国連の諸々のイニシアティブ、さまざまな国際機関、一連のG8やG20に結びつけられるだろう。——だが、いずれにせよ認めざるをえないことは、今日にいたるまで、世界への関心によって動機づけられた三つの要請の各々について、それを世界規模で満たすことのできる審級ないし力は存在していないということである。三つすべてを満たすものがもちろんないことは言うまでもない。だが、同時に認めなければならないのは、問題に対処することのできた「国家的」な政治もまたこれまでなかったということである。環境保護は、世界における生活様態の文化的多様性の保護と対にならなければ意味をなさず、この文化的多様性のほうもまた、<sup>コスモポリティック</sup>世界政治——これは、世界的な抗争の画一的で期待外れの事後的な管理には還元されない——を必要とするということ、このことは、どのような「国家的」な政治も認めてこなかったのである。

とはいえ、世界への関心が政治の中核にあるとすれば、この関心の三つの次元、すなわち、環境的、文化財的、複数的という三つの次元を関連づけることは、<sup>コスモポリティック</sup>世界政治的な活動にとっての、まさしく政治的な任務となるだろう。これは、政治に固有の抗争性という次元において、エコロジー的および居住空間的な要請を担うものなのである。だが、今日、グローバリゼーションと呼ばれるものの効果のもとで人類が向かっているのは、この方向だろうか。

#### 4. 非世界的、非人間的グローバリゼーション

この問いに対する答えは否定的なものとなるだろう。この経済的なグローバリゼーションの動きについては、アレントの言葉で言えば全般化した生のプロセス (*process of life*) の全般化によって導かれたものというかたちで、その概略を描くことができるだろう。そこでアレントは、このプロセスを、家内化、消費、画一化という、世界を単一な地球という次元へと還元する分ちがちがたく結びついた三つの体制に関連づけていたのだった。

##### 家内化 vs 公共化

第一に、経済的なグローバリゼーションは、<sup>ドメスティック</sup>家内領域の無制限な拡張に対応すると同時に、アレントがかつて理財 (*chrématistique*) と呼んだものにも対応している。これはすなわち、オイコノミア、家中の統治のことであり、そこではその力がおよぶ領域の全体が単一で同一の家内管理へと帰着させられることになる。だが、生産性が増大してくると、この統治は惑星全体へとその効果を波及させていくことになる。<sup>エコノミー</sup>経済が、まずは国家経済となり、次いで多国家経済となり、ついに超国家的、つまり地球的な経済となりえたのは、家事の組織化および消費の様態を地球の全表面へと増殖させ拡張させることができたからにほかならない。こうして世界は、調整とマネジメントによる資源と利潤の経営管理へと従属することになるのである。

この角度からみると、グローバリゼーションはまずもって家内化 (*domestication*) である。これは、単に飼いや搾取という意味だけでなく——あるいは世界的な「かり立て」や「計算化」(ハイデガー) だけでもなく——、<sup>プライベート</sup>私営化 (*privatisation*) という意味においてもそうである。だからグローバリゼーションは、世界的全般的な家内化と私営化のために、公的サービスや公的領域を削除していくわけである。このような公的領域では、利潤や享受に向けられた生産/消費という様態とは別の存在様態、行為様態が展開される。とりわけ、文化的と言われる世界内存在の様態や、われわれが政治的と呼ぶような行動がそうであるが、それらはいずれも、また各々の仕方、共通の世界を樹立しようとし、財の消費や交換の管理以上に、人間的な紐帯を設立させようとするものである。だが、ほとんど周囲から孤立した消費の家屋のために、こうした公的な空間が削除されていき、このことによって、共通の世界の消失がもたらされることになる。というのも、世界は、需要システム (生産、交換、消費) に共通した管理のために、新自由主義的な資本主義論理に共通した従属化のために、あるいはまた万人に同一な消費行動のために、もはや世界でも共通でもなくなるからである。私営化されていない、家内化されていない、非-経済的な公的空間のみが、われわれのあいだに、一つの世界が樹立されることを可能にする。その世界とは、われわれを一つにする世界ではなく、どのような利益 (*intérêt*) によっても (利潤によっても) 規制されず、唯一〈あいだにあること (*inter est*)〉によってのみ規制されるような関係によって、互いに距離をとることができるような世界である (世界への関心とは、〈人間たちのあいだにあること (*inter homines est*)〉なのである)。

##### 消費 vs 居住

第二に、利潤の法則に従うことによって世界は生物の食欲さへと従属するようになり、世界を構成するあらゆるものが消費や交換のための財へと変容することになる。とすると、オイコノミアは単に世界の家内化ないし私営化にのみ基づくのではない。それによって、世界は、生の再生産を目ざし、消費と享受という定義上私的なものの対象になるのである。こうして経済は、生存のあらゆる側面に対する、とりわけ世界に対する「生のプロセス」の勝利を確証するようになる。経済に固有のこの生のプロセスの全般化によって、世界全体がはかない消費可能な財へと変容し、後には何も残らなくなるのだ……ただし、廃棄物は別である。これは定義上、非-世界的なものだから

だ。消費にしか結びつかない生産活動は、実のところ、世界を構成することがない。せいぜいのところ、経済は、ジオトープ、すなわち生活圏のうちで繰り広げられることになるが、それ自身、「生の飽くことのない性格」のために、自らの構成要素のうちで危険にさらされている。生がその法則を拡張させるところでは、世界はこの生そのものの名によって消え去るおそれがあるのだ。

ここから、経済法則と世界への政治的関心との二者択一が生じてくる。だが、この二者択一は、あたかもオイコス〔家〕の道理がオイコスの法に対置されるかのように、<sup>エコノミー</sup>経済学とエコロジー<sup>7</sup>とのあいだにあるのではない。というのも、エコロジーは、指数的な経済成長の文字どおり無世界的な効果を修正しようとしつつも、生の飽くことをしらないプロセスに従うだけであって、このプロセスを遅らせこそすれ、やはりそれを保存するものだからである。エコロジー的な要請はこうして環境的な関心のうちに汲みつくされ、自然保護は成長に資するものとみなされることになるだろう。

逆に、認めなければならないのは、オイコスとポリス、家内的で理財的な家屋と政治的行為の公的空間という判然たる二つの秩序のあいだには乗り越えられない矛盾があるということである。そしてここで合わせて認めるべきは、世界はエコロジーという道理だけに基づいては存続することはできない、ということである。というのも、エコロジーは、環境（つまり生存圏）を保存することにしか、あるいは惑星規模の生態系をできるかぎり保護しつつ持続的な展開を支えることにしか関心を抱かないからである。世界の存続が要請するのはこれとは別のものである。それは一方で、自然的世界や生活世界のみならず、人間的な、文化の世界をも保護しようとする、居住空間的な要請に呼応した文化財的な政治である<sup>(4)</sup>。他方では、さまざまな共同体が抗争的なかたちでもたらず価値の複数性を尊重することに関心を払う、世界政治的な要請に呼応する複数的な政治である。

世界の命運はただエコロジーのみに依存するのではない。それが「政治的エコロジー」であってまだ。それを受け持つのは、厳密な意味での世界政治である。すなわち、環境や自然——言いかえると、生物の生態系という意味でのみ理解された世界——の単なるエコロジー的・経済的保護ではなく、世界の三つの次元をすべて引き受けようとする世界政治である。ここでは、環境および文化財の保護は、抗争性および討議的行為の諸々の形態につき従うものとなる。そして、国家ばかりでなく、世界の諸々の人民たちもまた、これを展開することができるのである。

## 均質化 vs 複数化

というのも——これがいわゆるグローバリゼーションの第三の側面だが——、世界とは、単にこの惑星に住むさまざまな人々に共通した環境を構成する諸々の要素からなる比較的均質な総体なのではなく、何よりもまず、複数の共同体が抗争的に構成されており、それを通じて、人間存在が有する多様な象徴的な形式が関連づけられ保存される場だからである。それは、仕事／作品に加えて、活動に基づく構成である。この複数性なしには、世界も、共通世界もない、そういう複数性である。世界が共通であるということには次のような逆説がある。すなわち、人間的、つまり共通の世界があるためには、それ自体として多様で、内的かつ外的な抗争のうちに置かれた諸々の世界の共同体の還元不可能な複数形を媒介にしなければならない、というのがそれである。ところで、世界があるとすれば、それは、複数形での文化のためにほかならず、共通世界があるとすれば、それは複数形での文化や国家のためにほかならない。複数の世界の分割、複数の共同体の異質性、これが世界を共通世界として構成するものである。分割なしには、共通性はないのだ。ところで、経済的なグローバリゼーションは、世界をあらゆる機能性や収益性から自由になった居住の場とみなすのを忌避し、消費の財へと転換しうる資源の膨大な生息域とするばかりではない。それは、あらゆる生産物をオイコノミアというたった一つの家屋へと連れ戻し、文化的複数性を——これなしには世界はありえないのに——破壊するのだ。経済的なグローバリゼーションが付き従っているのは、つまり、人々、共同体、国家の政治的な存在様態を支える複数性という条件とまっこうから矛盾する、画一化ないし均質化の法則である。

逆に言うと、政治的な世界がはじまるのは、他の諸々の世界の単なる承認においてではない。そうではなく、それらの世界のあいだの関係性において、つまり諸々の世界の——吸収でも統合でも、画一化でも基準化でもない——構成（composition〔原義は共に置くこと〕）においてなのである。政治とは複数の世界の構成である。あるいは

はまた、しばしば抗争的な、分有および分割による世界の構成である。諸々の共同体はそれ自身の内部で緊張関係に突き動かされているが、それらのあいだでこそこの構成は結び合わされる。これこそが、<sup>コスモポリティック</sup>世界政治の、複数の世界の政治の意味である。それは、世界の全体を、資源、生産、交換、消費の共通な管理や経営に従属させるものではなく、また、合法的な暴力を専有するような共通の力の統治へと従属させるものでもない。さらにそれは、諸々の需要の自然な調整や諸々の享受の自然の調和という神話を援用することもしない。それは、各々の国家、各々の共同体、各々のグループのただなかであって、公的空間を繰り広げる他者たちとの関係を打ち立てるものである。この空間において、現れることおよび行為することの原理と事実的な可能性とがつねに尊重されるよう、誰もが現れ、行為することができるのである。

## 結びに代えて

こうして、グローバリゼーションの時代における人間の条件に値する政治の世界的な意味および意義が描かれる。それは、同時に生の環境であり、文化の世界であり、討議的な行為の網の目であるような世界の可能性を自らの活動の地平とする<sup>コスモポリティック</sup>世界政治である。それが世界政治であるというのは、そこにおける行為の各々、その制度的な体制の各々、エコロジー的、居住空間的、世界政治的な要請が妥当する次元の各々においてめざされているのが複数的な世界の創建でありその存続だ、という意味においてである。そのために必要とされるのは、世界を構成する行為者および傍観者——個人であれ人々であれ——の自由かつ平等であり、そしてまた、行為する者たちに共通のこの複数の世界が現れる公的空間の創設である。各々の都市、<sup>ボリス</sup>各々の共同体、各々の国家は、共通の討議および行為へと差し向けられた公的・政治的空間を創設することができるし、そうしなければならない。この意味においては、世界政治は、——たとえ民主主義的なものであれ——国際秩序や世界国家の創設を求めるものではない。それがめざすのは、いっそう根本的かついっそう困難なことであるが、各々の個別の国家——これが分割や利益抗争を通じてこの世界を構成するのだが——のなかで共通世界を促進するための公的政治を実効的に創建することである。そしてこのことは、何よりもまず、市場のグローバル化のプロセスによって、この世界を環境、文化財、複数性という三つの次元すべてにおいて破壊しようとする金融的、経済的権力に抗するかたちでなさねばならないのである。

### 原注

(-) 世界貿易機構 (WTO) の交渉の際に「文化的例外」と呼ばれるのがこれである。

### 訳注

- 1 「グローバリゼーション」は、フランス語では、英語風の globalisation ではなく、mondialisation の語が用いられることが多い。語義的には、「グローバリゼーション」が「グローブ (globe)」すなわち「地球」をもとに「地球化」を意味する語であるのに対し、mondialisation は、フランス語の「世界 (monde)」をもとに「世界化」を意味する。タッサンは、本論全体を通じて前者を「経済」に、後者を「政治」(あるいは自身の言う「世界政治」) に結びつけて考えている。
- 2 仕事/作品としたのは、フランス語の oeuvre である。この語は、基本的には日本語の「作品」のように仕事の成果を表す単語であるが、ここではとくにアレントにおける work の訳語として用いられている (日本語での定訳は「仕事」)。先の労働 (labor / travail) が「自然」を対象とし、「家」や「経済」に関連する活動性であるのに対し、この仕事/作品は、狭義では物の「製作」を行なう活動性であるが、タッサンの枠組みではとりわけ文化的・社会的領域に関わる。アレントにおいても「世界」の物質的な条件はこの「仕事」によってもたらされる。
- 3 エクメーネとは地理学の用語で、とりわけフランスの地理学者オーギュスタン・ベルクが提唱する概念。日本語では「風土」と訳されることが多いが、そもそもは、人が加工し居住可能になった場ということを意味する。「経済」や「生態学」と同じ「オイコス」を語根とする。ベルクについては、『風土学序説——文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』(筑摩書房、2002年)を参照。
- 4 民間シンクタンク、ローマ・クラブの1972年の報告『成長の限界』。
- 5 1992年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた環境と開発に関する国際連合会議。通称「地球サミット」。
- 6 2012年6月にブラジルのリオデジャネイロで開かれた国連持続可能な開発会議。通称「リオ+20」。
- 7 経済 (エコノミー) は「オイコス (家)」と「ノモス (法)」を語源とし、エコロジーは「オイコス」と「ロゴス (論理、道



理)」を語源とする。

## 参考文献

- ARCHIBUGI, D. (2009): *La démocratie cosmopolitique. Sur la voie d'une démocratie mondiale*, trad. Fr. L. Lourme, Paris, Ed. du Cerf. [ダニエル・アーチブージ『グローバル化時代の市民像—コスモポリタン民主政へ向けて』法律文化社、2010年]
- et HELD, D. (1995): *Cosmopolitan Democracy. An Agenda for a New World Order*, Cambridge, Polity Press.
- ARENDT, H. (2000): *Les origines du totalitarisme*, suivi de *Eichman à Jérusalem*, Paris, Gallimard, coll. « Quarto ». [『全体主義の起源』みすず書房、1972-1974年]
- (1995): *Qu'est-ce que la politique ?*, trad. Fr. S. Courtine-Denamy, Paris, Seuil. [『政治とは何か』、岩波書店、2004年]
- (1981): *Condition de l'homme moderne*, trad. Fr. G. Fradier, Paris, Calmann-Lévy. [『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年]
- (1974): *Vies politiques*, trad. fr. J. Bontemps, Paris, Gallimard. [『暗い時代の人々』ちくま学芸文庫、2005年]
- BALIBAR, E. (2010): *La proposition de l'égaliberté*, Paris, PUF.
- BENVENISTE, E. (1969): *Vocabulaire des institutions indo-européennes*, vol. I « Economie, parenté, société », Paris, Minuit. [エミール・バンヴェニスト『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集』言叢社、1986-1987年]
- BERQUE, A. (2000): *Ecumène. Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris, Belin. [『風土学序説—文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』筑摩書房、2002年]
- CHEMILLIER-GENDREAU, M. (2002): *Droit international et démocratie mondiale: les raisons d'un échec*, Paris, Ed. Textuel.
- HELD, D. (1995): *Democracy and the Global Order*, Cambridge, Polity Press. [デイヴィッド・ヘルド『デモクラシーと世界秩序—地球市民の政治学』NTT出版、2002年]
- KANT, E. (1986): « Projet de paix perpétuelle » (1795), in *Œuvres philosophiques*, vol. III, Paris, Gallimard, coll. « La Pléiade ». [カント『永遠平和のための』岩波文庫、1985年]
- MARRAMAO, G. (2003/2009): *Passagio a Occidente. Filosofia y globalizzazione*, B. Boringhieri, Torino.
- NANCY, J-L. (1990): *Une pensée finie*, Paris, Galilée. [ジャン=リュック・ナンシー『限りある思考』法政大学出版局、2011年]
- (1993): *Le sens du monde*, Paris, Galilée.
- RANCIERE, J. (1995): *La mésentente*, Paris, Galilée. [ジャック・ランシエール『不和あるいは了解なき了解：政治の哲学は可能か』インスクリプト、2005年]
- SLOTTERDIJK, P. (2006): *Le palais de cristal. A l'intérieur du capitalisme mondial*, Paris, Hachette-Pluriel.
- (2010): *Sphères II. Globes*, trad. Fr. O. Mannoni, Paris, M. Sell.
- TASSIN, E. (2012): *Le maléfice de la vie à plusieurs*, Paris, Bayard.
- (2011 a): « L'Europe cosmopolitique : l'épreuve du non européen », in *Philosophie du projet politique européen* (Jean-Marc Ferry, ed.), Paris, Presses de la Sorbonne.
- (2011 b): « De la domination totale à la domination globale : perspectives arendtiennes sur la mondialisation d'un point de vue cosmopolitique », in *Hannah Arendt : Totalitarisme et banalité du mal* (A. Herzog ed), Paris, PUF.
- (2008): « Condition migrante et citoyenneté cosmopolitique : des manières d'être soi et du monde », <http://popups.ulg.ac.be/dissensus/document.php?id=349>, *Dissensus* n° 1, ULg Liège.
- (2007 a): « L'Europe cosmopolitique et la citoyenneté du monde », *Raison publique* n° 7, octobre 2007, Presses de la Sorbonne, pp. 45-63.
- (2007 b): « L'étranger et le citoyen : un enjeu politique », *Relations* nov. 2007, Montréal, pp. 17-22.
- (2003): *Un monde commun. Pour une cosmo-politique des conflits*, Paris, Seuil.
- (1999): *Le trésor perdu. Hannah Arendt, l'intelligence de l'action politique*, Paris, Payot.
- VALERY, P. (1931): *Regards sur le monde actuel*, Paris, Stock. [ポール・ヴァレリー『現代世界の考察』、『ポール・ヴァレリー全集』第12巻、筑摩書房、1978年]